
東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第25号 2018年3月

ご当地検定を活かした世代交流まちづくりの取り組みについて

— 大江町重要文化的景観普及啓発を目指す高校生ワークショップの実践から —

Efficiency of Students made Certification Test for Local Landscapes to promote landscape consciousness

— Advantages of collaboration and view exchanges of three different school stages, High school students, elementary school pupils and university students, to make up Certification Test —

志村 直愛 | SHIMURA Naoyoshi

ご当地検定を活かした世代交流まちづくりの取り組みについて

— 大江町重要文化的景観普及啓発を目指す高校生ワークショップの実践から —

Efficiency of Students made Certification Test for Local Landscapes to promote landscape consciousness

— Advantages of collaboration and view exchanges of three different school stages, High school students, elementary school pupils and university students, to make up Certification Test —

志村 直愛 | SHIMURA Naoyoshi

Oe town, in Yamagata Pref., designated as an Important Cultural Landscapes in 2013, had a series of workshop event in 2016 in pursuit of notifying its historical admirable landscapes to townspeople. At the workshop, high school students developed "Wagamachi, my hometown, Oe town Expert Certification Test", for elementary school pupils. Students of Tohoku University of Art and Design (TUAD) worked as arrangement staffs. Elementary school pupils took the Certification Test and sent their comments telling their impressions and thoughts to high school students. In recent years, certification test for a particular place is spreading throughout Japan. Making Certification Test for local town by students could promote their concerns to local landscapes and collaboration of three generations make its activity more effective by means of exchanging their views peculiar to each age.

Keywords:

山形県大江町、重要文化的景観、ご当地検定、高校生ワークショップ

Oe town in Yamagata Pref, Important Cultural Landscapes, Expert Certification Test, workshop event for high school students

はじめに

本稿は、平成25年3月に国選定重要文化的景観となった山形県西村山郡大江町において、その町民に向けた普及啓発事業の一環として平成28年度に取り組みされた高校生ワークショップの企画運営経過について取りまとめたものである。

山形県西村山郡大江町の東端部、左沢地区は中世の山城楯山城と近世の小漆川城の城下町として、また江戸時代を中心に最上川舟運で栄え、往時の面影を伝える商家や蔵などが城下町の短冊状地割りと共に残り、山形県内初の国選定重要文化的景観に選ばれた町である。選定4年目を迎えた現在、重要な構成要素とされた歴史的建築物の修理、保全が進められている他、サイン計画をはじめとした関連事業が進行中である。

人口8200人という小さな町ではあるが、その分、施策への理解や合意形成が早い特徴もある一方で、国からのお墨付きとはいえ「重要文化的景観」というやや難解な文化財の評価やその価値の正しい理解にはやや高いハードルがあり、「なぜ私たちの町が?」といった声が普通に聞かれるのが実情である。選定後の保存計画の中では、景観づくりの主役となるべき地域住民の文化的景観の評価の意義を理解し、何を守り伝え、どう行動していくか、つまり住民として何をなすべきかといった意識の醸成や、具体的な取り組みへの積極的な参画を促す普及啓発施策が重要な鍵となろう。特に、都市形成史や町並み景観といった専門的な領域に負う部分については、高齢者や若者を中心にその真の意義や評価などについて丁寧な説明が欠かせないだけでなく、そもそも自分たちの町に対する評価の意味、それ

以前に特徴や魅力の実態を知ること、それ以前に町について興味、関心を持つこと、といった入り口の議論、有効な施策が求められることとなる。

取り組みの目的

本稿に登場する高校生ワークショップは、選定後、特に若者を代表して、地元の高校生を中心とした若い世代の住民あるいは在学者に向けて、わが町を知り、この世代の役割を考えていくこと、高齢化が進む現代において、先人たちが残し、伝えてくれている知恵や工夫に学び、それらを次の世代に伝承していく重責を担ってもらう必要があるという視点から企画された。

そのためには、日常の授業や実習レベルで興味関心を持ってもらう機会を設けるべきであるという発想から、町内に立地する山形県立左沢高等学校の協力を得て、町が主体となる取り組みに高校生徒に参加してもらい、まちづくりの一翼を担ってもらう実践的な企画として動き出したものである。

これまで大江町教育文化課の企画として、文化的景観の構成要素となる実際の建築所有者管理者のヒアリングを通じて、自分たちの世代にできる取り組みを考えたり、文化的景観のサイン計画の検討を始めるイベントとして、町民、文化財建築所有者が求める案内サインの希望条件に沿って、1年生の生徒100名前後が理想のサインを提案するワークショップなどが開催されて一定の意識醸成効果を挙げてきた。

一方で、高校生だけを単独の対象として実施する取り組みは、校舎内、出ても現場取材、検討のみの成果にとどまり、学びや提案も高校生の仲間内で完結する傾向があった。

本来、歴史や文化の継承には、若い世代、特に高校、中学、小学生とさらに若い世代への意識の波及が求められ、また多世代を跨いで連動できるような仕掛けが望ましいとも考えられる。

そこで昨年度は、以下の条件を満たす企画を検討することとした。

1: 高校生を対象とした取り組みによりまずは高校生自身が町を知る機会とする。

2: 大学学部生、大学院生との接触の機会を作り、上の世代と交流、経験を積む。

3: 小学生を対象としたアクションを通じて、下の世代へアプローチする。

4: 小学生家族内でのコミュニケーションを促す企画を通じて、多世代間交流を図る。

5: ある程度継続的に実施できるシステムが構築できる蓄積発展型の取り組みを設定し、今後自動的に成果が増えるなど成長していく仕掛けを考える。

こうした条件は、これまで継続的に行ってきた高校生ワークショップの途上で課題として上がってきた項目を列挙したものであり、この企画は毎年常に発展更新する形で成長を遂げている。

取り組みの概要

一昨年の高中生ワークショップの中で自分たちにできることの一例として、大江町や文化的景観についてのクイズ問題を作り解いてもらうという提案があったことからこれを応用し、クイズ問題を作成するだけでなく、解いて検証しながら完成度を上げ、また世代間交流を誘発させる仕組みを考えることとした。[図1]

蓄積型の取り組みとして、問題数を増やしつつ、作成側、回答側の役割を明確にし、双方のモチベーションを維持することも考慮して、近年話題となっているご当地検定の形式を参考に、これに準じた形式で問題集を作成、蓄積していく形を検討することとした。

ご当地検定とは、日本各地の自治体や商工会議所が主催して、その地の観光、文化、歴史などの知識の認知度を4択形式で試験し、評価を行うものである。地元の知識を積み上げ、より理解するきっかけとし、階級制を設けたり、土地によっては観光案内人の資格と連動させている自治体もある。

郷土を理解し、来街者へのおもてなしの心を育てるという目的を掲げた検定もあり、そうした意味では今回の趣旨にも合致しており、本企画には相応しいスタイルであると考えた。

今回、検定にならない、大江町を知るための問題案を作成する-問題案をお互い精査検討する-他者からのアドバイ

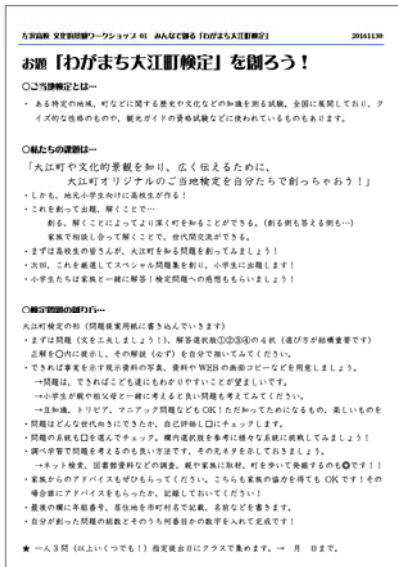


図1 高校生ワークショップ解説書き

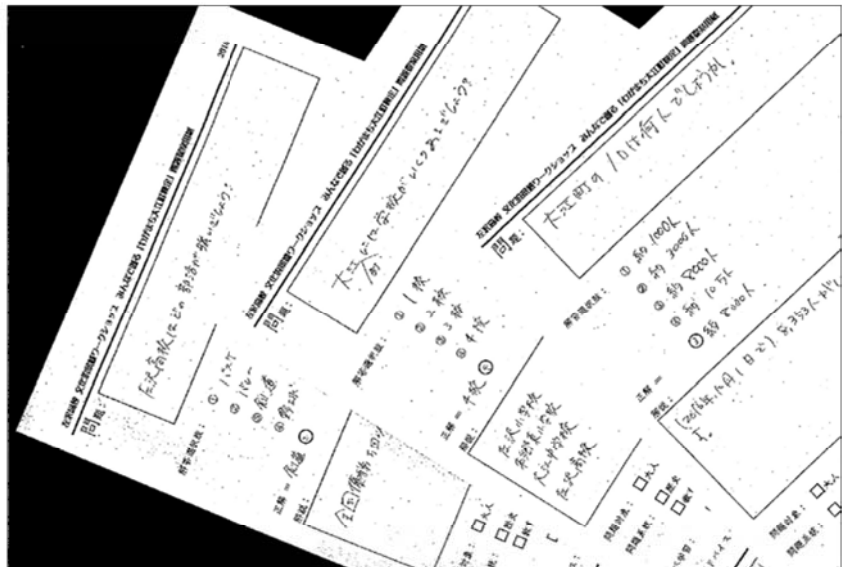


図2 高校1年生103名から提出された問題案のシート

スを入れてブラッシュアップする-問題を確定し解いてもらう-問題についての感想、評価を受ける-結果を出題者にフィードバックするというstepを設け、参加者にあまり負担感のかからない手法で運用でき、教育効果、地元についての知識向上と誇りの醸成に繋がるよう考慮していくことを目指すものとした。

また、主役となる高校生を中心として、様々な次元の世代間交流を企てつつ、多くの人々と関わっていくことをめざし、検定問題案を高校生が作成-問題案を大学生が検証整理-高校生に戻してブラッシュアップさせる-問題案を大学生と教授が検証完成度の高いものを選別確定し各クラス対抗の形で問題集を作成する-これを小学生に出題-小学生は自力と両親、祖父母など家族と団らんしながら回答、また大人も回答できるようにする-回答しながら問題を評価してもらい-評価を出題元の高校生にフィードバックする、という段階設定を行った。

以下のStep解説がその内容の詳細である。

段階別の取り組み内容

■Step1 高校生による町と検定を知る学習体験

平成28年11月30日、県立左沢高等学校を会場として、同校1年生103名を対象に、取り組みの第一歩として基調講義を行う。講義内容は、重要文化的景観の取り組みと大

江町の特徴についてとし、その基礎知識を得て、検定問題案作成へのヒントとする。

またご当地検定とその具体的事例を紹介し、その形式、特徴、意義や、作成上のポイントなどを解説、問題案作成の意識向上を図った。

特にご当地検定の講義では、地元山形の問題で構成された既存の「山形検定」を抜粋出題し、全員に回答させ、答え合わせの上で、設問の特性や4択の回答事例の発想法などについても解説し、具体的に自身が問題案を作成する際の参考と意欲の向上となるよう心がけた。[図3]

■Step2 高校生による問題案作成

同日、講義の後で重要文化的景観を含め、大江町に関する小学生向けの問題案を、一人3案づつを目標に出題するよう講義を聞いた同校1年生103名に依頼した。その際、問題の種類、系列として、以下の例を列記し、幅広い問題種を用意できるよう工夫した。

問題系統は、1:大江町の歴史情報から、2:大江町の地理情報から、3:大江町の日常風景から、4:左沢高校関連から、5:重要文化的景観関連から、の5種類。問題の形式は、A=文章による問題、B=検定の形式にならない四択の解答選択肢、C=正解番号とその解説、D=正解を裏付ける資料や情報のコピー添付、の4項目を揃えることとして指示した。

また、問題作成の留意点として、できるだけ多くの人が何のことも理解できる情報からの出題がベストであること。高

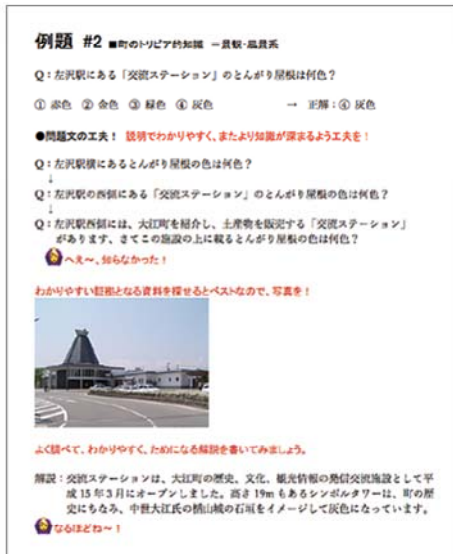


図3 高校生へ問題作成のポイント提示メモ

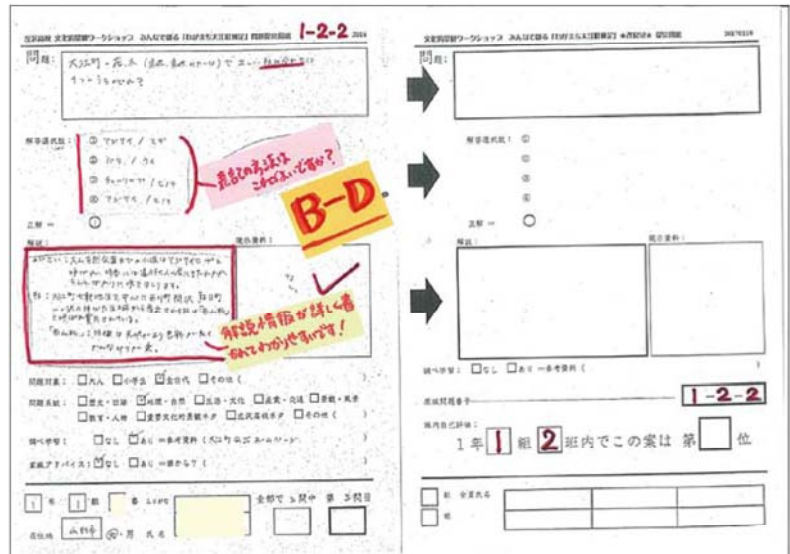


図4 大学生による高校生へ向けての問題作成添削アドバイスシート

校内のトピア的内輪ネタ問題は、意外性や共有価値のある情報なら可とするが、一般人にもわかりやすいものを目指すこととした。

こうした条件の下、2週間の提出期限を設け、授業の宿題として高校1年生3クラス103名に問題案の作成を依頼した。

■Step3 大学生による問題案選抜とアドバイスの作成

この出題を受け、2週間後の宿題提出期限に高校で問題案が集められ合計210案の問題が提出された。[図2]

全問題を確認してみると、よく検討吟味され、優れた問題として完成したものもあれば、情報が不足していたり、内容がマニアック過ぎたり、正解が不確定だったりなどで問題の体をなしていないものまでレベル差が顕著に出ていた。そこで、全ての問題を東北芸術工科大学志村研究室の学部4年生3名に確認、点検してもらい、ランクA=問題として十分完成している、ランクB=改良すれば問題として成立する、ランクC=問題として成立しない…の3ランクに評価してもらい、ランクAとBの上位から選抜して、各クラスからそれぞれ概ね22か23問づつの総数67問までに絞り込んだ。

その上で各問題を点検、添削し、ブラッシュアップのためのアドバイスを研究室の学生、大学院生が分担し、問題シートに記載することとした。添削、アドバイスの内容としては、A=問題文:問題内容の適正、問いかけ方の表現、その統一性、子どもにもわかりやすい言語表現かどうか。B=四択の解答選択肢:考えさせる、練られた四択になっている

か、その中に正答はあるか。C=正解番号と解説文:本当に正しい答えか。解説の内容が正しく、わかりやすいか、読んだためになるか、ここだけ読んでも町の知識が十分に得られるか。D=正解を裏付ける資料や情報のコピー添付:間違いのない資料が添付されているか、の各項目をチェックした。

それぞれA4一枚の問題用紙をA3用紙の左側に配置し、上記で課題となる、あるいは手直しを必要とする項目の記号ABCD記載しながら、よい点、悪い点の評価を付箋紙記載で貼り付ける方式で掲載し、高校生自身がグループになり協力して各問題をブラッシュアップできる仕掛けを作成した。つまり、このA3シートの左側の原案の問題を解いてみて、大学生たちのアドバイスに沿って、問題を改良し、右側のA4用紙に改良問題を書き込んでいくというものである。[図4]

またここでは、結果としてできた問題を何問か解いてみて、その完成度について各班で評価してもらい、班内でのベスト順に並べ換える。つまり問題の完成度を評価し優劣をつける仕掛けも施してある。

■Step4 高校生自身による問題改良とベスト問題選抜

上記の要領で準備された各クラス作成の22か23問、3クラス合計67問の問題案は、原問題と改良問題を記入できるA3版の「問題改良用紙」に整理された。

これを、1年生3クラス103名に、各クラス概ね4人組の8班に分かれてもらい、各班に5問づつの問題改良用紙を割

り振り改良の検討を依頼した。割り振りの合計数は、5問づつ9班で45問となるが、これは各クラスで選ばれた問題数22,23のちょうど倍数になっている。これは同じ問題を最低2班でチェックしてもらうことで、改良案を2案とし、さらに各問題の完成度を複数班で評価、確認することで、選抜にも公平性を持たせることとしたものである。

2班に同じ問題を検討してもらう効果は顕著で、同じ問題でも改良のされ方に差があり、片方の班ではよい4択に改良されてベスト1になるも、もう片方の班では、文面の改良が不十分で5位に甘んじるといった結末も出ていた。こうした経過を経て、各組の8から9班からのベスト3問題が27問選出された。当然中には重複して優れた問題となった例もあり、各組からの選抜問題は概ね15問から23問の幅でベスト問題が選ばれた。

■Step5 小学生向け問題の選抜

高校生103名により改良案としてまとめられたA3版シート90枚が大学研究室に届けられた。これらを志村研究大学院1年生2名、4年生3名の計7名の手により合同で精査し、各クラス毎のベスト問題10問を選考した。選考にあたっては、

- 1: 基本的には高校生たちのベスト評価を重視する。高校生による出題なので、各クラスの意図は尊重する方向を基本とし、できるだけ各班で上位にランクアップされたものを優先する方向とした。
- 2: 一方で問題の内容について系統分野のバリエーション

に配慮する—とはいえ、同じ系統の問題が続かないよう、選別、出題順などに配慮した。

3: クラス別に同様の問題が採用されても重複は妨げないこととする。これは、クラス別に問題をまとめ、小学生1世代に対して、出題される問題は1クラス分1束なので違うクラスでの問題重複は支障がないと考えた。

4: 画像が必要なものがあった場合、出題時に掲示することで対応できるのでこれを認める。問題の中に、「どこどこにある何は」…といった特定の物件について聞く問題があったが、回答者が改めて調べる手間の軽減と、調べることにより正解がわかってしまう恐れもあるため、問題用紙の中に画像を取り込むことで解決できると判断した。ちなみに、全体で2問の画像が提示されている。

こうした評価基準をもとに、各クラスから10問づつを選出し、小学生とその家族へ渡す左沢検定問題集を準備した。[図5]

■Step6 小学生とその家族への検定問題出題

クラス対抗の形を取るべく、3クラス10問づつで束ねられた問題は、町立左沢小学校の6年生児童の全家庭に教育文化課を通じて配布されることとなった。

検定問題は、小学生家族に対しては、まず小学生が自分自身で与えられた問題を自力で解いてみる。親、兄弟など本人以外の家族で解いてみたいという人に解いてもらう。わからない問題を中心に家族と相談しながら解いてみる。という3段階の活用可能性を想定し、家族内コミュニ



図5 小学生向け検定の回答用紙

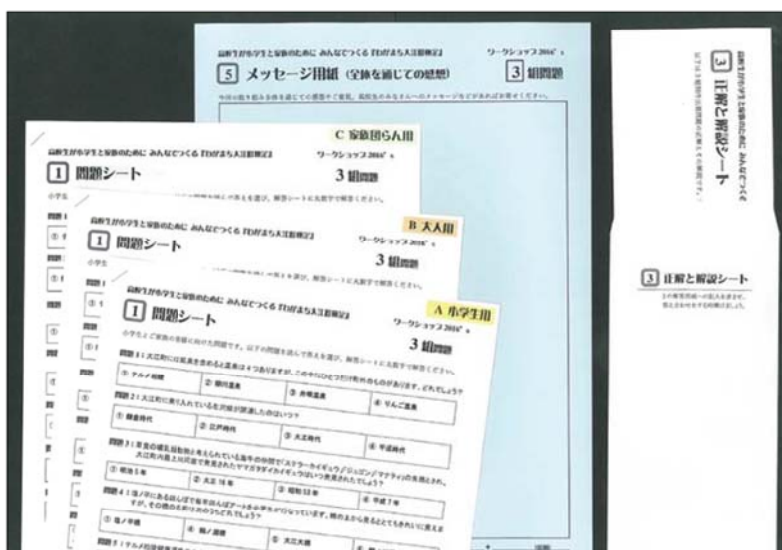


図6 小学生と家族へ配布した検定問題書類一式

ケーションを経て、祖父母から、父母、子供へと町の話や思い出についての対話、問題回答のための意見交換などを促すことを期待した。

そのため、問題、解答用紙、正解と解説以外に、それぞれの段階に応じて回答後に問題への感想と評価を行う感想用紙を小学生、家族(大人)、団らん用の3種類用意した。

この感想用紙には、10問の問題一問一問に対し、難易度、為になる度、問題完成度の3種の評価を5段階で評定し、問題へのコメントを記入する欄を設けた。

ある意味、検定問題全体の中で最も複雑な仕掛けとなったが、このフィードバックこそが本検定の主たる目的であることから、念入りな構成とした。

また、出題した高校生に向けてのメッセージシートを同封した。

結果、小学生家族1世帯家族へ配布する1枚の封筒の中に、「説明書き」、「検定問題用紙」、「問題用紙」、「回答用紙」、「正解と解説シート」、「小学生向け感想用紙」、「大人向け感想用紙」、「団らん用感想用紙」、「メッセージ用紙」の各用紙を色別に印刷して同包した。また「正解と解説シート」については別途小型封筒に封入するなどの工夫をして、1家族に1封筒で完結する検定問題一式を整えた。[図6]

■Step 7 小学生とその家族からの検定回答

教育文化課を通じて左沢小学校6年生2クラス全員にランダムに配布された検定問題は、3週間後に各クラスで回収され、総計43家族からの回答を得た。

小学生からの感想シートは43枚、メッセージシートは24枚に上り、温かい感想や激励が寄せられた。また家族大人の感想シートは9枚、団らん感想シートも6枚送られてきており、配布資料も少なくなく、また指示もやや複雑なものとなった取り組みにも関わらず、数多くの関心が寄せられ、また小学生はもとより、保護者家族にも挑戦していただけたことは実にありがたい結果である。[図7]

感想シートの中には、大江町に住んでいるのに意外に分からなかったという小学生や、解説シートを読んで大江の歴史を知ることができた、大江町の魅力を再認識できたといった保護者の方の感想も寄せられ、概ね期待通りの効果は上げられたかと思う。[図8]

■Step 8 出題高校生への結果フィードバック

小学生家族からの回答結果を整理し、出題者である県立左沢高校1年生103名全員を集め、成果報告会のワークショップを実施した。ここでは、1回目のワークショップの経過確認から、問題作成を依頼した2回目以後の大学の作業経過、以後小学生への出題と、小学生家族からの回答データの発表、やりとりの経過解説を行った。



図7 小学生家族からの団らんの感想回答

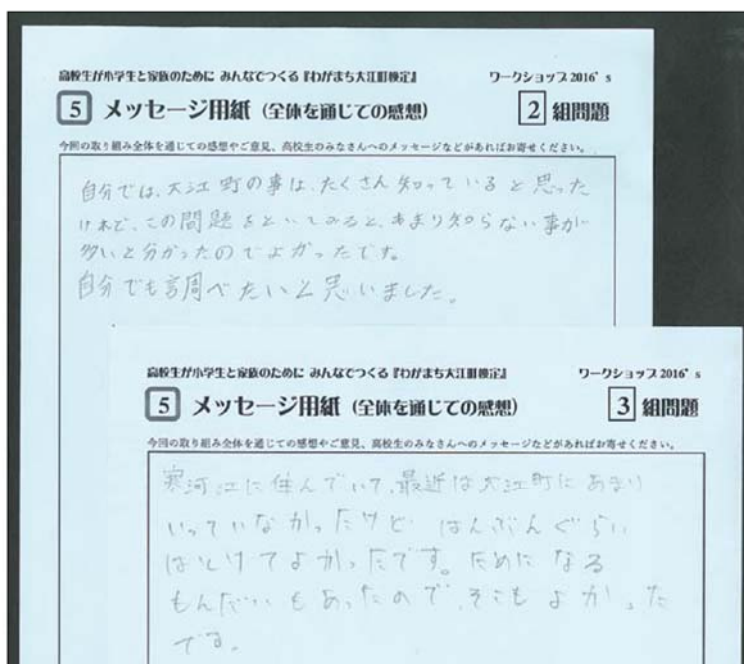


図8 小学生家族から高校生へ向けての感想メッセージの一部

資料作成のために、内容の精度を想定以上に上げる必要が生じ、明らかに作業の所要時間や手間数を増幅していく結果となった。

町への愛着や、世代交代を目的とした行事である以上、基本的には対面式のイベントとしてのワークショップの場において、その気概やこだわりを伝授しながら本来進めるべき取り組みであるが、一方で高校生を始めとする若者世代の個人主義傾向、対面行事への苦手意識、抵抗も強い現代の若者向けの行事として、このように対面の機会を設けずとも一定の成果を集められ、また経験を積める発展型の行事として、今後SNSや通信教育のようなスタイルでの企画設計も可能であろうとも考えられる。